VOL.4

日本聖公会 東京教区
インマヌエル新生教会
IMMANUEL SHINSEI CHURCH

初穂（はつほ）

教区主教 フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸　牧師 司祭 ステパノ 卓 志雄
2020年12月～2021年10月（新聖堂完成予定）まで、連絡は池袋聖公会伝道所へ
〒171-0021 東京都豊島区西池袋 5-24-5 電話：03-3986-4709　FAX 03-3986-4180
MAIL：immanuel-s.tko@nskk.org　HP：http://immanuel-s.jp/

「歩き出した一歩」

牧師　司祭　ステパノ　卓　志雄

今年の春、夏、秋に渡って新型コロナウイルスはわたしたちの生活の多くを変えてしまいました。インマヌエル新生教会においても様々な出来事がありました。礼拝の休止、礼拝堂及び牧師館の建築に関する堅信受領者総会、礼拝の再開、教会と牧師館の引越、小竹町の礼拝堂・牧師館の解体、池袋聖公会伝道所での生活スタート、池袋聖公会伝道所の売却に関する堅信受領者総会など。

多くの人々がコロナ以降の教会を心配しています。安心安全な礼拝、日曜学校、愛餐会、各種集会・イベント、礼拝の出席人数と献金の減少による財政問題、宣教力の低下などの問題であるがそれだけではないと思います。ご存じの通りコロナ以降（Post Covid-19）は「新たな日常」になるでしょう。インマヌエル新生教会においても新しい礼拝堂の完成に伴い新しい営みがわたしたちを待っているでしょう。様々な変化は希望と同時に不安をもたらしています。わたしたちが経験したことのない変化なので。

10月25日行われたインマヌエル新生教会の堅信受領者総会が終了して、二日後27日から29日まで日本聖公会65（定期）総会が開かれて出席しました。池袋聖公会伝道所の売却に伴い、これから訪れる様々な変化を考えながら管区総会に臨みました。今回の管区総会の中で決議された議案の中の一つは「宣教協働区と協働委員会の設置、伝道教区新設について」でした。東京教区のこれからの歩みに直接関係する決議です。これから、東京教区は、北海道教区、東北教区、北関東教区と共に、「東日本宣教協働区」を組織して、広大な東日本エリアでの福音宣教を推進していくことになるからです。その他、様々な議案が決議されましたが、管区総会について申し上げますとキリがありません。しかしもっとも印象に残ったのは植松誠首座主教の開会挨拶でした。

『（前略）……　聖書の中に「歩く」という言葉がたくさん出てきます。歩くというこの単純であたり前の動作、実はとても危険なことなのです。それは地面を両足で踏みしめて立っているところからバランスを崩して一歩を踏み出すことです。この不安定な動作をすることによって私たちは前に進めます。神はアブラハムにもモーセにも、占星術の学者たちにも、パウロにも、そして、昔日本にやってきた海外からの宣教師たちにも「歩け」とお命じになります。今いる安住の地から、敢えてバランスを崩して歩み出せとおっしゃるのです。故意にバランスを崩すこと、しかもその前途には砂漠や危険、窮乏、迫害などが待ち構えています。そこには心配や不安、恐怖もあるでしょう。しかし、勇気を振り絞って一歩を踏み出していった聖書の中の偉人たちに、そして私たちの先達たちに、主のお導きと祝福が注がれたことも私たちは知っているはずです。不安定の中に敢えて歩み出すこと、それは既に主イエスと共にある信仰の世界です。そこに私たちは招き入れられているのです。この日本聖公会総会が主のご栄光を表すものとなりますように。またこれからの日本聖公会の上に、主の祝福をお祈りいたします。』

言うまでもなく日本聖公会に連なる人々に対する励ましの言葉ですが、今のインマヌエル新生教会に対する励ましの言葉でもあります。わたしたちの営みはまさに「歩き出した一歩」です。新型コロナウイルスの影響によってわたしたちの一歩は大変苦しいものでした。しかしこのような状況の中でも、わたしたちは止まるのではなく、敢えて一歩を歩き出してこれからを進みました。不安も恐れもありました。しかし心配は祈りによって希望へと変えられます。神様はわたしたちと共におられしっかりとわたしたちを支えてくださるからです。インマヌエル新生教会に連なる一人ひとりの歩みも神様はしっかりと支えてくださることを固く信じます。

管区総会後、10月31日インマヌエル新生教会の礼拝堂および牧師館建築の「起工式」が行われました。参列者みんなは起工式式文の指示に従って、建平のまわりに張ってある縄に沿って歩みました。詩編51編を唱えながら。起工式にふさわしい素晴らしいお天気に恵まれ、希望に溢れる第一歩を刻むことができました。

教会委員会・建築委員会より

新教会建築、起工式に至るまで

建築委員長　バルナバ　玉井康之

一昨年から始まったインマヌエル新生教会の建替え計画も、今年に入ってコロナ禍によって礼拝も中止になり、信徒の皆さんとのコミュニケーションも儘ならず、色々ご心配をお掛けしていました。更に東京都では緊急事態宣言が四月四日に発令され、五月二十一日の解除迄、都市機能が停止される事態となりました。

その様な中、教会委員会・建築委員会では建築計画の歩みを止めないで進めるためにはどうしたら良いか?と、卓司祭の強い指導力のもと、毎週のように打合せを重ね、二月の堅信受領者総会に引き続き、五月にも「臨時」堅信受領者総会の準備が進められ、「インマヌエル新生教会の礼拝堂と牧師館取り壊しと新築の件」として詳細な資料が送られ、書面と電子による決議が行われ、その結果過半数を超える賛成が得られました。

更に、七月は三密を避ける為広い会場をとの事で、練馬ココネリホールにおいて建築説明会が行われ、出席出来なかった信徒の皆さんにはその状況を録画してお送りした次第です。とは言え、先が見えないコロナ禍の中で近隣に不安と迷惑を掛けてまで建築工事をするのは心配だ。又、建築費に関しては大きな借金までして、後世に負の遺産を残すのは反対だ!との意見も根強くありました。その中でも多くの信徒の皆様にご理解を頂けた事、大変感謝しております。

そして、八月中旬から引越し、解体工事が始まり、九月に入って池袋聖公会伝道所で二回に分けて信徒懇談会も開かれ、皆さんの心配も薄らいだのではないかと感じています。

又、解体前に近隣へ建築会社と建築説明を兼ね、ご挨拶に回った際、どちら様もとても好意的で、「新しい教会が建つ事を楽しみにしています」とのお言葉まで頂き、いかに日々卓司祭ご一家をはじめ信徒の皆さんが誠意をもって近隣の皆様と接触していたかが、伺えました。

十月三十一日は雲一つない絶好の天気の中起工式が行われ、次のイベントは棟上げ式です。棟上げとは木造建築で木材を組み立て、最後に一番上の棟木を乗せる事です。これはレントゲン写真の様に実際の形が分かり、骨格が透けて見える時で、これからどんな姿になるのだろうと心が弾む時です。それは一月下旬の頃の予定です。二度と見ることができない姿ですので、皆さんもぜひ足を運んでご覧になってみてください。

7月 4日　再開して初めての聖餐式の日

6月5日　緊急事態宣言解除直後の対面と Zoom による教会委員会

7月12日　活発な意見交換が行われたココネリでの信徒説明会

教会のあゆみ　7月～11月

オープンチャーチと聖ガブリエル聖堂聖別解除

アグネス　下泉小波

7月初め、新型コロナ感染防止のため3月から約4ヶ月にわたって停止されていたインマヌエル新生教会での礼拝が再開され、それに伴って新教会の建築も本格的に動き始めました。教会建物の解体は、8月17日からと決まり、そこから逆算し、教会の荷物の引っ越しは7月30，31日、聖堂の聖別解除式は7月26日と日程が決定しました。旧練馬聖ガブリエル教会の信徒にとっては50年、それ以外のインマヌエル新生教会の信徒にとっても4年近く礼拝を共に行い、信仰生活の拠点ともなっていた聖ガブリエル聖堂との最後のお別れをどのような形で行うか、コロナ禍での聖別解除式のあり方は、最も悩ましい議題として教会委員会で色々話し合われました。本来なら、教会員はもとより、インマヌエル新生教会に関わりのあった全ての教役者、信徒、ご近所の方々など、大勢の方をお招きし、ともに感謝の祈りをささげ、そのあと食事を一緒にしながら思い出話に花を咲かせる、1年前には当たり前だったお別れの形が、コロナという予想もしなかった事態に、変更を余儀なくされました。

協議の結果、聖別解除式の日は礼拝のみ行い、出席者は歴代関係教役者とボーイスカウト代表者、信徒の代表として教会委員だけが参列という、ある意味残念な、寂しい聖別解除式となりました。7月以降、礼拝が再開されてもそれぞれの事情で礼拝出席者はコロナ以前の半数程度、せめて3月以降、主日の礼拝に出席できていない方にも、3蜜を避け、ご自分のタイミングで聖堂とのお別れの時間をもっていただければと計画されたのが、7月23，24日の2日間のオープンチャーチです。

7月23・24日 オープンチャーチ

コロナ禍のもとでお茶一杯のサービスもできず、さらに会館には引っ越しの段ボールが山積みと、とてもお客様をお呼びする状態にはなかったのですが、それでも2日間で30人ほどの方がお訪ねくださいました。当教会の信徒の他、ご近所の方や他教会の信徒の方々も別れを惜しんでいらしてくださり、それぞれ聖堂で写真を撮ったり、会館に並べてあった膨大な数の懐かしい写真や、古い信徒さんたちの素晴らしい手作り作品などを眺めたり、手に取ったり、ゆっくりとお別れの時間を過ごされました。

7月26日 聖別解除式

聖ガブリエル聖堂での最後の堅信式に引き続き、午後4時から行われた聖堂の聖別解除式は、高橋東京教区主教の司式の下、祈祷書に従って粛々と執り行われました。聖堂には歴代教役者の五十嵐主教ご夫妻、廣澤司祭、佐久間執事、また大畑主教、中川常置委員長、第3代牧師・故佐藤信康司祭夫人の百合子さん、ボーイスカウト練馬第5団、団委員長の稲吉さん、前団委員長の小宮山さんが来賓として参列され、静かなうちにも厳かな式となりました。式の様子とその後の来賓からのメッセージは参加できなかった信徒の皆様に録画映像と文書で先日配信いたしました。どなたのメッセージも単に過去を振り返って懐かしむというものではなく、今後のインマヌエル新生教会の歩みに期待し、祝福とエールを送ってくださる内容で、参列した教会委員一同、これが終わりの式ではなく、新しく歩みだすインマヌエル新生教会の第一歩であるとの認識を新たに、気の引き締まる思いでした。新聖堂完成の時には、今度こそ信徒全員が集まって、共に感謝の祈りをささげ、これからのインマヌエル新生教会のミッションを確認する、祝福の時を持てることを切に祈っています。

9月13日

信徒懇談会を経て

今私たちに出来ること

タビタ　岩﨑節子

私が池袋聖公会と出会い、共に過ごした時間は35年程になります。

初めて来た時は雨漏りのする教会にびっくりしたことを覚えています。その後今の新しい聖堂が与えられました。イースター、クリスマス、SSの子供達とのお泊まり会やバザー、等沢山の楽しい思い出があります。又、母を見送ったのもこの教会です。今も池伝に来ると懐かしく、なんとなく落ち着きます。

しかし、今はインマヌエル新生教会となり、今後、この池伝をどうしていくか！といった事を考えた時、懇談会で色々な方のお話を伺い、その中でも特に永井さんの「維持する事ではなく活かすことが大事」というお話がとても心に響きました。

もちろん残せるものなら残したい。それこそ心をひとつにして、やっとの思いで今のこの建物が与えられた。ですが、出来た頃と今では社会状況も大きく変わってしまった。財政的にも厳しく、マンパワーも多くを望めない。又、新型コロナウィルスによって世の中全体が大きく変わってしまった。維持出来ない事は大変申し訳なく、情けない思いもありますが、維持する事によって多くの負債をこれからの若い人に残すことはやはり違う。今、私達に出来る事、活かす事を考えるとやはり売却する事なのでは…と思いました。それでも、この池袋聖公会との思い出は色あせることなく、一人一人の心にしっかりと刻まれている事と思います。ありがとう、池袋聖公会！

育んできたものを守りつつ

テレジア　照岡好枝

30年程前に教会が新築された時には、信徒も増えると期待が膨らんでいたとのことです。しかし、その後バブルの崩壊もあって時代も変わり、徐々に信徒の減少・高齢化・それにともなう献金の減少などもあり、教会の修繕もままならない状況になっていました。

そのような状況の中で3教会が合併し、新しい教会を作り一緒にやって行こうという事になりました。池聖に所属していた人達は、この3教会が一緒になる事を決断した時に、池袋聖公会という教会が無くなる事と同時に建物に対しても心のどこかで覚悟していたのではないでしょうか　現実として、池袋の建物を維持するに必要な人的・金銭的不足という事もあります。

このような背景の中での懇談会でしたので、大きな反対もなかったのではないかと思います。池聖の育んできたものを守りつつ、建物を維持する事に執着することではなく活かす事、新しい教会に集中して皆で歩もうという方向性が示されたように思います。時代の流れの中で、池袋聖公会が一定の役割を終え、次のステップへ進む事が求められているのかもしれません。

10月25日

信徒総会報告

臨時堅信受領者総会での思い

トマス　大石　昇

10月25日（日）午後、み言葉の礼拝に続いて、臨時堅信受領者総会が開かれました。出席はコロナ禍にもかかわらず4分の1近くにもなり、約半数の方が委任状を提出して下さいました。議案が「池袋聖公会伝道所の土地と建物売却」承認の件であり、コロナ禍の中で、どうしても重い雰囲気でした。

質疑応答のはじめに、池袋聖公会伝道所の聖堂や備品について、これまであまり語られてこなかった由来や歴史について、詳しい方からの説明がありました。聖堂そのものについてもそうですが、初めて聞く話も多く、改めて池袋聖公会伝道所に連なる信徒や先人たちの思いに、心を馳せずにはいられませんでした。

その後、現状での教会財務状況の質問や、将来に向けての新しい聖堂の維持費の質問があり、承認の決議が行われました。

思い起こせば、2年前の秋の池袋聖公会での臨時信徒総会で、（先日、天に召されたばかりの）糟谷恵さんがすっくと立って、先輩方への裏切りかもしれないけれど賛成する、という趣旨の意見を力強く述べられました。池袋聖公会（伝道所）を生かしきれなかったことへの申し訳なさを、私もひしひしと感じました。

聖書の中で、主のご復活後、鍵をかけた家の中へ主が真ん中に立って「あなたがたに平和があるように」と述べられた時も、多くの信徒はまだ不安な気持ちでいっぱいだったのではないかと思います。いま私たちはまだ不安な気持ちをいっぱい抱えていますが、外に向かって歩み出す時かもしれません。私はトマスなので、一歩遅れて追いかけたいと思います。3つの教会がひとつになるとき、私たちの心は燃えていたことを思い出して。

10月31日
インマヌエル新生教会

新礼拝堂・牧師館 新築起工式をむかえて

ペテロ　田中盛人

10月31日　快晴に恵まれた起工式

10月31日新礼拝堂・牧師館の起工式をむかえる事が出来ました。晴天に恵まれ、信徒、教会委員、建築委員、設計者の石川さん、卓司祭、高橋主教、施工業者の渡辺建設の関係者の計30名程で、主教を司式者として起工式が行われました。十数分の短い式でしたが、皆の祈りのうちに無事終える事が出来ました。

この日をむかえるに当たり、約三年前の事が、頭の中で走馬燈のように流れ行きました。三教会がそれぞれにこのままでは将来に向って力強い宣教を進めて行く事の困難さを感じ、なんとかしなければ、と思い、三教会が一緒になって進んで行こうと合併に向け歩み出しました。実際一つの教会となってみると、予想していた通り、主日の礼拝が練馬の礼拝堂では手狭で、一日も早く大きな礼拝堂がほしいという事になり、新しい土地を探したのですが、そんなに簡単に見つかる訳もなく、今あるこの練馬の地に、新しい教会をつくるという事になり、今日の起工式を迎えたわけです。完成は明年の7月を予定しています。

一日も早く皆で礼拝が出来る日を楽しみにしたいと思います。『コロナ』のために今は、様々な制約の中での礼拝をしなければなりませんが、新しい礼拝堂であれば、少なくも百名程度であれば一回の礼拝でまかなえる予定です。また、一階の会館にもＡＶ機器も備えるので、さらに人数が多くても十分に対応可能です。

教会の役目としての宣教する事の意味を考えると、「主日に礼拝・聖餐が行われている」、この事につきると思われます。今は『コロナ』のため思うようには励行されていませんが、完成すれば、少なくもこの事は実行して行く事が可能になる事と思います。この一番大切な事が実行出来る事に感謝したいと思います。

愛餐会についても『コロナ』が収まれば再開できる様、設備等も整備されています。こちらも再開出来る日を楽しみに待ちたいと思います。

『コロナ』により今までとはぜんぜん異なった世の中になりました。その時代に合った宣教を模索して行かなければならない時代になったと思います。この問題は教会員皆様の問題でもあります。教会は多様な人々の集りです。ぜひ皆様の知恵を出し合い、一つ一つ解決して行きましょう。この時期この時に新しい礼拝堂が与えられたこの事が、私たちへの神様の励ましであろうと思います。祈りをもってこの励ましに応えて行きましょう。

洗礼・堅信の恵にあずかって

7月12日

幼児洗礼

「クリストファー、フランシス、そしてセバスチャン」

グレース　塚本さやか

誰もが想像もしなかった、未曾有の事態。新型コロナウィルスによる、外出や他人との交わりの自粛。教会に集うことも、ままならなくなりました。

そんな中、三男陽太（ひなた）の洗礼式を7月にしていただけることになり、本当にほっとしました。

卓先生に、陽太と触れ合っていただく機会も少ない中、洗礼名のご相談をするため、陽太の近影写真を送りました。するとすかさず、卓先生から、「セバスチャン」はどうでしょうか？というご提案。セバスチャンは、スポーツ選手の守護聖人であるとのこと。

陽太は、活発な兄貴2人に揉まれ続けて、私たち親も驚く程の身体能力（防衛反応？）を発揮していたので、お送りした写真1枚で、その個性を見抜かれ、スポーツにまつわるセバスチャンの名をいただき、心底、それしか無い！！と思いました。

さらに、セバスチャンは、ペストの流行にも負けなかったとして、流行病の守護でもある、と。この時代に、我が子が、その名を与えていただけることに、神様の力を感じました。長男、クリストファー航太、次男、フランシス晴太、三男、セバスチャン陽太。この3兄弟を、私の家族に与えてくださった神様のお導きに、心から感謝し、身が引き締まる想いです。

セバスチャン陽太、今1歳3ヶ月となり、塚本家最強のジャイアンとして、たくましく君臨しています。この先の人生、セバスチャンの名に恥じない、強く心優しい男性として生きてくれるよう、祈ります。皆さまの暖かい交わりを、今後もよろしくお願いします！！

7月26日

堅信の恵を受けて

コルネリウス　三浦昭彦

7月26日、礼拝堂聖別解除式が始まる前の時間帯で、堅信式を行って頂きました。

当初の堅信式の予定は4月12日のイースターでしたが、COVID-19感染症拡大の影響により3月8日から礼拝が休止となり、堅信式はいつ開催されるかわからない状況になりました。昨年の12月24日に洗礼を受けてから堅信の準備期間が約3カ月半あったわけですが、「まだまだ早いよ。」という主のご計画なのだろうと自分に言い聞かせました。

いよいよ、7月から土日に3回に分けて礼拝が再開しましたが、それでも毎日のように新規感染者が増えていました。その数は日に日に増加し、堅信式の前日には295人となっており、礼拝が休止になった時点と比較しても大幅な増加を示していました。このため、まだまだ早いよということなのではないかと自問自答していました。

しかしながら、当日は礼拝堂聖別解除式という大事な予定もあったこともあり、無事に堅信式を迎えることができました。洗礼式の時は家内と家内のお友達だけでしたが、堅信式には子供たち家族まで立ち会ってくれたのが、とてもうれしく思いました。家内も子供たち家族も洗礼式や堅信式に立ち会うのは初めてでしたし、昨年の6月9日に香蘭女学校で堅信式を見たはずですが、私自身にとっては初めての経験で、緊張気味でした。あっという間に終わった堅信式でしたが、これも、主の許しがあったのだろうと自分勝手なことを考えています。また、皆様には感謝しています。

「この世につかわされた自分」

エステル　藤田早苗

私は、去る7月26日に高橋宏幸主教の司式もと、堅信の恵みを授かることが出来ました。今までの歩みを少し振り返りますと、生後一年になる少し前に、幼児洗礼を受けたことが聖公会との出会いになります。クリスチャンであった母（堀岡富美子）、そして三人の教父母に見守られ、母の実家にほど近い、群馬県の新町聖公会で森護司祭により、幼児洗礼を授かりました。

その後、母は練馬聖公会へ移籍し、時折母に連れられて教会の礼拝に参加していました。小学生の頃には、新町聖公会でお世話になった古木司祭がいらした立教大学の礼拝堂や新座の礼拝堂を訪ねた思い出もあります。時が経ち、母がマルチン教会在籍の折には、バザーで、中村司祭に大変お世話になりました。

そして今やっと、私自身が堅信の恵みに授かるところまでたどり着きました。昨年末に申し出た際には、快くお話を聞いていただき、勉強会では様々な教義について教えていただきましたこと、深く感謝申し上げます。

私はとても不器用でせっかち、結果を出すために力不足であるにも関わらず、結果が出せない自分にふがいなさを感じてしまうところがあります。それでも、何とかしたい、そして何とか人と人とが繋がる大切さにも喜びを感じていたい、という想いにも、（自分の未熟さを乗り越えて人生のテーマとしたい、という想いを持ちながら）、進まぬ歩みに苦しむこともあります。そんな弱さをたくさん持って、様々な悩みに打ちひしがれる自分がいました。しかし、ことある毎に、聖書の言葉に思い起こされ励まされ、気持ちを奮い起こしながら歩んできていたのでは？と、ここにきて、やっと振り返るに至りました。

神様は実は、私の歩みを見守り、導いてくださり、常にそばに居て下さったのでは？　独りよがりで不器用な生き方しかできない自分にとって、生きていくための方向は、どんなに自分であがいても見つけることができないのではないかと感じます。今、こうして神様の導きにより生かされている自分を強く感じるようになり、自分が生きている間に、頂いた命を用いて、すべきことに真摯に向き合っていくことが、自分のこれからの道になる、と確信することが出来たように思います。

教会での様々な動きは、まだわからないことばかりですが、これから、神様の御心に耳を傾け、皆様とともに歩む者となりたいと思っております。コロナウィルス感染拡大、という歴史上大きな出来事、そして三つの教会が一つとなり、新しい聖堂を建築する、という時代の節目において、堅信式を受けることが出来たことも、きっと何かの意味があるのではないかと思います。「信じること」を大切にして、『この世につかわされた自分』を用いて、神様からの教えと導きを羅針盤として、これからどんな荒波がきても、冷静に乗り越えていけたら幸いです。

インマヌエル写真館

11 月 15 日　子供祝福式

11 月 22 日　収穫感謝礼拝

石川設計士による建築進捗説明会（11 月 22 日）

続くコロナ禍の中で、日曜学校ができない日々が続いています。そこで収穫感謝の企画として、ユンさんのアイデアで、子供たちから一人一文字を集めたメッセージ・ビデオを作りました。

追悼／信徒情報

追悼

盛谷ハル子さんを偲んで

マーガレット　宮崎愛子

いつも出席なされていたのは篠田さんのお宅でしていた家庭集会の席でした。自転車で颯爽とお見えになりました。佐藤司祭の頃と記憶しています。勉強の後、「お茶のひととき」になりますと我が家で飼っているインコの話になりますと、彼女も家で飼っているインコの、紙を「チョキチョキ」ちぎるお話を今でも覚えています。

私が「リバティプリント」の柄が好きで着ますとお話すると「私も大好きなの」とのこと、次週はお手製の物をお召しになって現れることも度々でした。今も娘が「リバティ」の方ね、と申します。手元がご器用でバザーの折には須山さんのお力になられたと思います。

いつもニコニコしておられるお顔を拝見するとこちらも微笑みに引き込まれます。

主の平安がありますように。

母、工藤多恵子を見送って

アンデレ　工藤徳彦

母が息を引き取ってから四カ月が経ちました。その頃は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言のさ中で、その一カ月前の3月から病院への立ち入りが禁止となり、顔を見ることができたのは最後の数分でした。現在8月下旬になっても状況はあまり改善していないようで心が痛みます。

そのような状況のため、ごく身内だけで見送ることとしましたが、卓先生に遠方までお越しいただき、お祈りをしていただいたことは大変ありがたく、家族一同感謝しております。

死という言葉には終わりでなく始まりである、悲しみよりも旅立つという前向きな意味があると伺いました。母は晩年、入退院を繰り返しながらも頑張って生きてきたので、最後は「お疲れ様、行ってらっしゃい」と声をかけ、穏やかな気持ちで送り出すことができました。

10月には納骨の祈りが終わりましたが、世の中が落ち着き、母には安らかに眠ってもらいたいと祈念しております。

終の住処

ナタナエル　菊田　聡

父マッテヤ菊田顕は、今年の8月7日に天に召されました。享年91歳でした。急性大動脈解離とのことで、入院もせずに終の住処となった自宅で息を引き取りました。

父は牧師の息子として、韓国の牧師館で生まれました。戦後、宮城県の気仙沼市に引き上げてきた父は、職場が変わるたびに、仙台、平塚、大船、盛岡で地元の教会にお世話になってきました。

岩手から戻った際に、中野区の江古田に引っ越してきたことが、今の教会との出会いとなり、練馬の旧聖ガブリエル教会に籍を置かせていただくこととなりました。私も小さいころ、聖堂を走り回っていた記憶があります。

江古田に引っ越してから8年ほどたった時に、一家は千葉県の我孫子に転居をしました。近くの教会に転籍するか悩んだそうですが、お世話になった方が大勢いる、慣れ親しんだ聖ガブリエル教会にそのまま籍を置くこととしたそうです。両親にとって、教会とは場所や建物ではなく、そこに集う人々なのだったのだろうと思います。

前列左が菊田顕さん（7月21日撮影）

結局、父は旧聖ガブリエル教会の聖堂が閉まるところまで見守ってから、天に旅立っていきました。半世紀近くの時を一緒に過ごした練馬の教会は、父にとって第2の終の住処といえるのかもしれません。終の住処を旅立った父は、今は主の身許で大好きだった母と仲良く過ごしていることと思います。

転入された方

7月26日　ヨセフ齋藤寛之さん
カトリック清瀬教会より

ご誕生

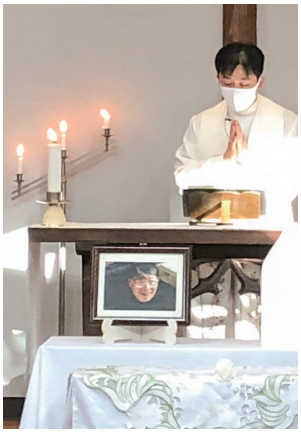
2月23日　早川柚希ちゃん

8月16日　井出英志ちゃん

聖婚式

10月4日　マーガレット荒尾彩子さん
と小橋直哉さん

11月3日
ジェームス＝サガナウロウ
ベヘサダ＝マラナハカウンヌ
（ミャンマー聖公会）



ご逝去

2020年1月～10月

1月24日　富永美信兄　告別式
3月24日　ルツ　盛谷ハル子姉
4月10日　ヨハネ　水上　定治兄
4月14日　スコラスチカ　工藤多恵子姉
7月13日　マリア　亀井よし子姉
8月11日　マッテア　菊田　顕　兄
9月13日　モーセ　佐々木良二兄
10月14日　サムエル　糟谷　恵　兄
10月30日　マリア　小芦　真理姉

編集後記

◇「コロナ禍」のために発行が遅れました事をお詫びします。礼拝の長期中止と再開、引越し、建築説明会、臨時信徒総会、聖堂聖別解除、起工式等、新教会は激動の半年でした。礼拝もままならない中ではありましたが、日々の営みはそれなりに積み重ねられてきたわけで、皆様へのお知らせ報告等、小誌の役目が無かった訳ではありませんでした。まだまだこの様な状態が続きますが、編集子一同頑張ります。（T）